令和５年度　防衛大学校卒業式
木原 防衛大臣訓示

本日、岸田内閣総理大臣ご臨席のもと、防衛大学校卒業式の挙行にあたり、防衛大臣として一言申し上げます。

まずは卒業生諸君、卒業おめでとう。そして御家族の皆様に対しましても心からお祝いを申し上げます。

今、我が国の防衛を牽引する幹部自衛官とならんとする諸君の勇姿に接し、防衛大臣として心強く、そして頼もしく思います。

本科を卒業する諸君。諸君は、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、様々な制約を受けながらの学生生活だったと思いますが、そのような中においても、心身を鍛え、同期と切磋琢磨してきたことと思います。どの先輩も経験していないこの４年間を乗り越えたことに自信を持って、幹部自衛官としてこれからの防衛省・自衛隊を担っていくことを強く望みます。

また、人の組織である防衛省・自衛隊では、防衛力の中核である自衛隊員が能力を発揮できるよう、働きやすい環境を整備することが、必要不可欠であり、諸君には、チームのリーダーとしてふさわしい立ち振る舞いや心構えが求められています。

特にハラスメントは隊員相互の信頼関係を失墜させ、精強性を揺るがす、決してあってはならないものです。ハラスメントを一切許容しない環境の構築に向け、共に全力で取り組んでまいりましょう。

先ほど岸田総理も述べられたとおり、私たちは今、歴史の転換期に直面しています。「歴史は繰り返さないが韻を踏む」アメリカの作家マーク・トウェインが残した言葉であります。今から１７０年前、ここからほど近い浦賀にペリー提督が上陸しました。我が国は鎖国を終え、若い幕末の志士たちが中心となり、明治維新へと歩みを進めます。時代は現代とは異なりますが、そこに共通するのは若い力、そして、自分たちの未来は自分たちで切り拓くという強い意志です。

諸君の先輩たちもまた、それぞれの持ち場持ち場で未来を切り拓こうとしています。例えば、我が国は今、イギリス・イタリアと、史上初めて共同で次期戦闘機を開発することとし、そのための国際機関を立ち上げることとしています。この取り組みは防衛力の中核である戦闘機の能力を強化するのみならず、今後数十年にわたる、世界の安全、安定及び繁栄の礎となるものです。

これから諸君を待ち受けているのは、こうした新たなチャレンジです。前例踏襲ではこれからの時代を生き抜くことはできないでしょう。困難も多くあると思いますが、新しい時代にふさわしい、諸君の一層の努力を期待しています。

そして留学生の皆さん、皆さんが本校で培った知見や経験は、皆さんのこれからの人生にとってかけがえのない財産になるものと確信しています。同時に皆さんと我が国との深い繋がりは、我が国にとっても大きな財産であります。今後、母国において活躍されることを心から願っています。防衛協力・交流の礎は、人と人との繋がりです。

先日の日本・太平洋島嶼国国防大臣会合の機会を捉え、フィジー、パプアニューギニア、トンガに対して、防衛大学校に留学生を受け入れることを、私から提案をし、先方から喜んでお受けしたいとの回答を得ました。皆さんのような留学生がさらに増えることで、防衛大学校をハブとした交流の輪もますます広がっていくことになります。本日卒業する皆さんが、同じ時間を過ごした「仲間」として、それぞれの活躍の場において国際社会の平和と安定という共通の目標に向かって歩まれることを望みます。

研究科を卒業する諸君。不確実性が増す国際情勢の中にあって、あるいは技術の進歩がその速さを増す中にあって、部隊勤務を経て、我が国の守りを一層万全にすべく、更に高度な研究を求めた志高き諸君が本校で身に付けた知見を、それぞれの持ち場で今後十分に発揮し、益々活躍されることを切に期待しています。

御家族の皆様。御家族の入校に様々なご心配もあったかと思いますが、この様に立派に成長し無事に卒業の日を迎えることができました。改めてお祝いを申し上げます。卒業生諸君は今後、国防の最前線で活躍されますが、これからも、どうぞ温かく見守り、更に励ましていただければと思います。

最後になりますが、日頃から防衛省・自衛隊、そして防衛大学校に多大なる御理解と御支援を賜っております来賓の皆様に篤く御礼を申し上げますとともに、卒業生諸君を立派な幹部自衛官として送り出してくれた、久保学校長をはじめ教職員各位に敬意と感謝を表し私の訓示といたします。

令和６年３月２３日
防衛大臣　　木原　　稔